

# 教科別の指導と各教科等を合わせた指導の関連に関する一考察 — 体育的要素を含む指導に着目して —

発達臨床支援高度化コース 18AD106

野口 千慧

【指導教員】 山中 冴子 長江 清和 細渕 富夫

【キーワード】 教科別の指導 各教科等を合わせた指導 障害児体育

## 1. 研究の背景・目的

特別支援学校（知的障害）では、学習によって得た知識や技能が実際の生活の場で応用されにくいという児童生徒の特性から、実際の・具体的な内容の指導がより効果的であると考えられ、各教科等を合わせた指導が多く実践されてきた。一方で、新特別支援学校学習指導要領では、各教科等を合わせた指導について、

「各教科等において育成を目指す資質・能力を明らかにし、各教科等の内容間の関連を十分に図るよう配慮するものとする」と明記された。このように、各教科等を合わせた指導を実践する上では、教科別の指導との関連を明確にすることが求められている。

体育がとりわけ学齢期の障害児・生徒の発達にとって大きな役割を果たしていることは言うまでもなく、特別支援学校では、日常的に体育的要素を含む指導が行われており、それらの指導内容や方法についての実践例は多数みられる（渡邉ら、2007）。それらの教育課程届上の分類は、「体育」「日常生活の指導」「自立活動」等である（菅原、2011）。しかし、新学習指導要領を踏まえると、教科としての体育の指導と、その他の場面で行われる体育的要素を含む指導の関連については検討する必要がある。

そこで本研究では、特別支援学校では、日常的に体育的要素を含む指導が行われていることに着目し、教科体育としての指導と、その他の場面で行われる体育的要素を含む指導の関連について、現状と課題を考察する。

## 2. 方法

### (1) 文献研究

1年次は、先行研究及び通常学校の学習指導要領から教科体育は子どもに何を身に付けさせようとしているかを明らかにする。2年次は、特別支援学校の教科体育について、特別支援学校学習指導要領や障害児体育の実践例も踏まえ、目的や方法を整理する。

### (2) 調査

2年次に、特別支援学校の教員を対象に、授業実践に関する調査を行う。教科体育及び各教科を合わせた指導としての体育的要素を含む指導に関する質問紙調査と、カリキュラム・マネジメントに関する聞き取り調査を行う。

## 3. 研究内容

### (1) 通常学校の学習指導要領における体育

中央教育審議会（2016）は、平成20年から施行された学習指導要領による体育の成果と課題を次のように述べている。成果としては、運動やスポーツが好きな児童生徒の割合が高まったこと、体力低下傾向に歯止めがかかったこと等

が挙げられる。一方で、習得した知識や技能を活用して課題解決することや学習したことを相手に分かりやすく伝えること等に課題があり、運動する子どもとそうでない子どもの二極化傾向もみられている。子どもの体力については、低下傾向に歯止めはかかっているものの、体力水準が依然として低い状況がみられるという指摘がある。

この結果を踏まえて、平成29年3月末に新たな学習指導要領が告示された。新学習指導要領における体育では、体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題に気付き、その解決に向けた学習過程を通して、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することが目指されている。資質・能力は「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱に沿って整理されている。日野（2017）によると、体育における「知識・技能」は、知識の理解のもとに運動の技能を身に付ける、運動の技能を身に付けることで一層その理解を深めるなど、知識と技能を関連させて学習することが求められている。「思考力・判断力・表現力等」においては、自己の能力に適した課題をもち、活動を選んだり工夫したりすることが目指されている。そして、「学びに向かう力・人間性等」においては、運動の楽しさや喜びを味わい、豊かなスポーツライフの実現へと方向付けていくための態度が求められている。

現行学習指導要領の目標との違いは、小学校・中学校ともに学習過程に関する内容が示されたことと豊かなスポーツライフが強調されたことである。白旗（2017）は、新学習指導要領と現行学習指導要領と比較したとき、いくつか留意する点があると述べている。1つは、体づくり運動の領域でありは、小学校高学年以降「体力を高める運動」であったものが「体の動きを高める運動」に変わっていることである。数値を連想させる「体力を高める」から、資質・能力として捉えることのできる「体の動きを高める」という表記への変更は、体力向上の数値にとらわれすぎた授業が見受けられたことへの対応であると推測されている。2つめは、各領域のリード文に、「身に付けることができるよう指導する」と示されていることである。これは、問題解決“的”な学習をして終わりにするのではなく、確実に身に付けることを強調している（白旗、2017）。

(2) 特別支援学校における教科体育と各教科等を合わせた指導

特別支援学校(知的障害)では、各教科等を合わせた指導という独自の指導形態が存在する。知的障害のある児童生徒の学習上の特性として、『特別支援学校学習指導要領解説 各教科編(平成21年6月)』には、「学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくい」ということや、「実際的な生活経験が不足しがちであることから、实际的・具体的な内容の指導が必要であり、抽象的な内容の指導より効果的である」と記されている。そのため、各教科等を合わせた指導の有効性は広く認められ、多く実践されてきた。そして、体育授業以外の場面で行われる体育的要素を含む指導も多く行われてきた。

各教科についての特別支援学校学習指導要領の改訂の方向性として、中教審答申(2017)では「各部の各段階において育成を目指す資質・能力を明確にすることで計画的な指導が行われるよう、各段階共通に示している目標を段階ごとに示すことが必要である」とされた。つまり、これまでは各段階共通の目標が学部ごとに示されていたのに対し、今後は各段階の内容を踏まえて具体化された目標がそれぞれに示されることとなった(表1-1)。これは小学校等の各教科の目標・内容と共通の示し方である(宮崎、2017)。

表 1-1 現行特別支援学校学習指導要領と新特別支援学校学習指導要領における各教科の目標の示され方(特別支援学校小学部・中学部学習指導要領、2009、2018)

現行学習指導要領 (平成21年3月告示)	新学習指導要領 (平成29年4月告示)
小学部/算数	
<p>〔目標〕 具体的な操作などの活動を通して、数量や図形などに関する初歩的なことを理解し、それらを扱う能力と態度を育てる。</p>	<p>〔目標〕 (1)数量や図形などについての基礎的・基本的な概念や性質などに気付き理解するとともに、日常の事象を数量や図形に着目して処理する技能を身に付けるようにする。 (2)日常の事象から… (3)数学的活動の楽しさに気付き… ○1段階の目標 A 数量の基礎 ア 身の回りのものに気づき、対応させたり、組み合わせたりすることなどについての技能を身に付けるようにする。 イ 身の回りにあるもの同士を対応させたり… ウ 数量や図形に気付き… B 数と計算…</p>

これにより、新特別支援学校学習指導要領(2018)においては、通常学校との連続性を意図して、小・中・高等学校の学習指導要領をもとに、特別支援学校における体育についても系統性のある目標を設定することが求められている。

体育については、小・中学校学習指導要領と同じように、豊かなスポーツライフを目指すことをはじめ、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成」、「健康の保持増進のための実践力の育成」及び「体づくりの向上」を軸に実践を積み上げていくことが求められている。そして、各教科等を合わせた指導については、「各教科等において育成を目指す資質・能力を明らかにし…各教科等の内容間の関連を十分に図るよう配慮するものとする」と明記された。教科体育の指導と、その他の場面で行われる体育的要素を含む指導の関連を十分に図らねばならないといえる。

以下からは、障害児への教科体育の実践を把握するため、学校体育研究同志会及び全国障害者体育研究連絡協議会の実践例とその他の実践研究を取り上げる。

### (3) 学校体育研究同志会の取り組み

障害児体育についての先行研究は多くはないが、学校体育研究同志会(以下、同志会)は障害児体育の研究・実践に先進的かつ組織的に取り組んできた。どんなに障害が重い子であっても発達可能と考える発達観を基礎に、「体育・スポーツの喜びを・楽しさを!」をスローガンとして、障害教育の進歩と発展に寄与している。同志会の第64回夏季研究大会の障害児体育における報告(芝田、1973)に、「障害児体育の目標は体育の本質と一致する。そして、体育科教育の中味は、運動文化の継承発展である」と記しており、障害児体育はけっして特殊なものではないことが確認されている。

同志会(2007)は、個人の技能獲得を土台として、障害児体育のねらいについて、「できること」、「ともにうまくなること」、「ともに楽しみ競い合うこと」の3つを掲げている。「できる」ことによる自己有用感、自己達成感の獲得、「ともにうまくなる」ことによる共感関係の築き、「ともに楽しみ競い合う」ことによって自分の精一杯の力を引き出すことを求めている(学校体育研究同志会、2007)。

同志会(2007)が提案する授業プランを養護学校の学部ごとに紹介する。本研究と関連がある、知的障害のある子どもを対象とした実践である。各学部の実践プランにおけるねらいは、「できること」、「ともにうまくなること」、「ともに楽しみ競い合うこと」の柱にそってそれぞれ設定されている。

小学部段階を対象にした実践プランは「鉄棒あそび」である。鉄棒は、日常生活でほとんど体験することができない逆さ感覚・回転感覚を体験することが出来る教材である。日常生活での、歩く・走る・座る・寝るという動作では味わうことのできない、姿勢の変化と視線の変化を体験することが期待できる。同志会が考える3つの柱に沿ったねらいは、「できること」として“逆さ感覚、回転感覚、振りの感覚などの身体感覚の違いを感じる”“様々な技を体験する中で体

の使い方を”知る”ことが挙げられている。「ともにうまくなること」としては、「いろいろな感覚の違いを積極的に楽しむ”鉄棒で体を支えたりバランスを取ったりすることができる”ことを重視し、「共に楽しみ競い合うこと」として、「友達のしている様子を見て自分のしたいことを伝えることができる”ことを目指している。小学部の子どもたちは体つきが頼りなく、成長過程の未熟な身体であることから、「自分のからだを意識し、身体の動きに注目するような姿勢や活動をすることで自分の身体像を形成する」「人や物との関係に目を向け、具体的に働きかける動きをすることで、自分の周りの世界に対する意識を作る」ということが可能となる。

中学部を対象にした実践プランは、「ゴムひもペース走」である。3つの柱に沿ったねらいについては、「できること」として“一定のペースで走ると疲れにくいことが分かる”ことが目指されている。「ともにうまくなること」としては、「決められた時間、歩かずにゆっくり走ることができる” “ゴムひもを意識することで、同じペースで走ることができる”ことを重視し、「共に楽しみ競い合うこと」としては、「友達の走りを意識することができる” “友達と一緒に走ることができる”ことをねらっている。この実践は、時間・時刻の概念が理解しにくい子どもが存在することを踏まえ、一定ペースで走ることが出来るようにするために、地面からかすかに浮くか浮かないか程度でゴム紐を張り巡らせ、視覚的にペースを意識できるようにした実践である。自分に応じたペースで走る心地よさを体感し、自ら取り組むことができるようになることが期待される。

高等部での実践は、「8の字走（走運動）」である。3つの柱に沿ったねらいについては、「できること」として“8の字のコースの理解を部分から全体に広げる” “8の字コースのそれぞれの部分の走った時の体感の違いを感じる” “誰と一緒に走るのか分かる” “力を発揮できる相手を知る”ことが目指されている。「ともにうまくなること」としては、「8の字のコースに応じて、リズムとスピードを調整して気持ちよく走る” “8の字のコースそれぞれに応じた身体操作ができる” “走る相手を選ぶ”ことを重視し、「共に楽しみ競い合うこと」としては、「友達の走るのを見て、どのように走るのかイメージをもつ” “だれと一緒に走るのか自分の出番を捉えて、走る気持ちを高める” “いろいろな人と走ってみる”ことをねらいとしている。

この実践は、走る楽しさを速さではなく、リズムとスピードをコントロールすることに求めるという考えのもと実践されている。また、高等部段階では仲間の中で力を発揮できるような取り組みが大事にされている。何故ならば高等部は、仲間の中で自分も活躍したいという思いが膨らみ、身体エネルギーを自分なりに調整して、自覚的に身体を操作していくことに達成感をもつ時期であるからである。そのため、手応えがあり、やりがいのある教材が必要であり、仲間と達成感を共有できることが狙いとされている。また、人間らしい生活と発達に欠かせない運動そのものの独自性を追

求し、運動固有の内容を明らかにする「運動文化」に触れ、できる喜びを味わいながら自己有能感を高めることも大切にしていく。

このように、同志会は、子どもの発達課題を踏まえ、獲得すべき技能を明確にして実践している。人間らしい生活と発達に欠かせない運動そのものの独自性を追求する「運動文化」に触れることにもこだわって体育を構想している。

#### (4) 全国障害者体育研究連絡協議会の取り組み

全国障害者体育研究連絡協議会（以下、協議会）は、1977年にサークルが誕生した障害児体育のサークルが、全国規模で交流する機会を得たことによってでき、発展してきた研究会である（全国障害児体育研究連絡協議会、1987）。「教科とは、人類の歴史的・社会的遺産として体系立てられたものを学校教育で系統的に子どもの発達に則して、科学・芸術・技術の獲得を目指すものであり、教育課程の柱となる」（全国障害児体育研究連絡協議会、1987）という考えに基づいている。

協議会会長を務めた加藤（2009）による著書『やったー！もっともっと楽しい体育作ろう！』の中から、中学部のサーキットの授業について紹介する。この実践では、移動の力や体の前後バランスなどの運動課題にあった種目をいくつかの難易度を持たせて選択できるように工夫し、たっぷりと取り組んで達成感を味わうことを大切にしているという。また、子ども同士の繋がりや、一体感を大切に子ども自身の創意工夫した動きを引き出せるようにすることをポイントとしている。実践のねらいについては、①いろいろな動きにチャレンジし、体験してみる、②得意な動き・苦手な動きのどちらもがんばる、③一連のサーキットを見通して行い、自分なりに工夫してできる、④みんなと協力してゲームを楽しめる、と設定されている。

協議会の実践は、子どもの意欲や達成感を大切にしており、みんなと一緒に運動を楽しんだり、力を合わせるすばらしさを知ることを目指した取り組みとなっている。難易に幅を持たせて選択可能にして達成感を味わうことができるようにしたり、子ども同士による一体感を大切にしながら技能獲得を目指した取り組みになっていることから、同志会の掲げる障害児体育のねらいである「できること」、「ともにうまくなること」、「ともに楽しみ競い合うこと」にも通ずる観点をもって取り組んでいると考えられる。

#### (5) その他の実践研究

障害児体育に関する個人の実践研究は数少ないのだが、松坂（2017）は、知的障害児の運動技能習得に関する研究の中で、特別支援学校中学部を対象に個人技能に焦点を当て、サッカー授業の実践を行った。そこでは、サッカーの個人技能評価課題と評価項目を設定したうえで、全11回の授業を行い、ビデオ撮影をして運動課題の判定を行い、個人技能の改善について検討している。課題は、「静止しているボールを蹴る」「正面から向かってくるボールを蹴る」「ボールを追いかけて蹴る」「向かい合ってパスする」「ひとりドリブルをする」「走りながらパス」の6項目を設定している。

(6) カリキュラム・マネジメントとは

障害児を対象とした教科体育の実践を見ていくと、どの実践においても運動課題を明確にして、必要な技能をいかに獲得するかについて検討していた。運動文化や発達段階を踏まえた検討でもあった。このような実践の蓄積を、体育授業以外の場面でされる体育的要素を含む指導にもいかに関わらせるのが問われる。

どのようにして教科別の指導と各教科等を合わせた指導を関連付けるかを考える際に、新学習指導要領のキーワードの一つであるカリキュラム・マネジメントが深く関わる。カリキュラム・マネジメントは、以下の3つの側面から構成されている(中央教育審議会、2017)。

1. 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと
2. 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCA サイクルを確立すること
3. 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること

各学校には、カリキュラム・マネジメントを取り入れることで各教科等で育成を目指す資質・能力を明確にし、効果的に実践していくことが求められる。各教科等を合わせた指導を行う場合にも、各教科等の目標を捉え、教科体育と各教科を合わせた指導としての体育的要素を含む指導の関連についてもカリキュラム・マネジメントの中で検討されるものだと考えられる。

(7) 特別支援学校への調査

実際の特別支援学校における教科体育への考え方と、教科別の指導と各教科等を合わせた指導の関連を図るためのカリキュラム・マネジメントの実践方法について以下のように調査した。

質問紙調査では、埼玉大学教育学部附属特別支援学校に勤務する全教員を対象に、教科体育についてと、教科別の指導と各教科等を合わせた指導の関連について調査を行った。質問項目は、I.回答された先生方の属性、II.体育の意義、III.障害のある児童へ体育を行う難しさ、IV.体育を合わせた指導の有無と指導場面、V.各教科等を合わせた指導として体育的要素を含む指導を行う利点と難しさ、の5つである。

聞き取り調査では、埼玉大学教育学部附属特別支援学校に勤務する中学部主事の教員と研究企画係長の教員の計2名を対象に、教科別の指導と各教科等を合わせた指導の関連を図るためのカリキュラム・マネジメントの実践方法について調査を行った。聞き取り項目は、I.授業改善について、II.質問紙調査における回答の不一致について、III.学習指導要領に沿って履修を組むための工夫について、の3つ

である。IIについては、合わせた指導の有無について同学部内で回答が不一致であったため設けた質問である。

1) 結果

① 質問紙調査

I. 回答して下さる先生方について

教職経験年数は、中堅層が最も多く、次いで若手層が多い結果であった。通常学校勤務経験については、有が11名、無が12名と約半数ずつであった。

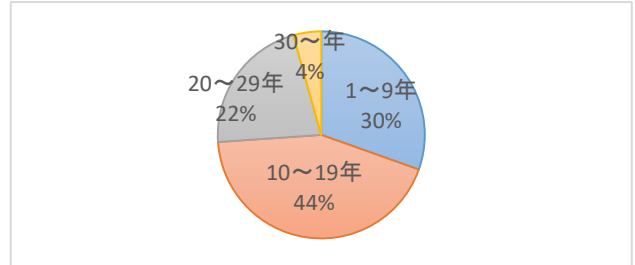


図1-1 教職経験年数 (回答者 23名)

II. ※<sup>1</sup>「体育の意義」について

最も優先順位が高い結果となったのは、「①体力をつける」である。2番目に高かったのは、「⑩「体を動かすことは楽しい」という思いを高める」で、3番目は「④生涯を通して運動に親しむ態度を身に付ける」である。

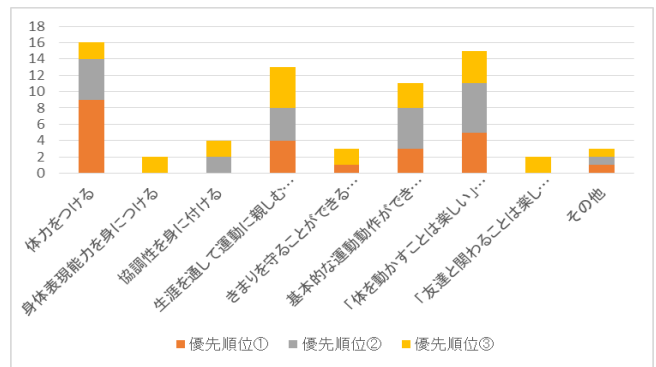


図1-2 体育の意義

(回答者 23名、優先順位をつけて3つずつ回答)

※<sup>1</sup>「体育の意義」選択肢

- ① 体力をつける
- ② 身体表現能力(身体を動かして何かを表現する力)を身に付ける
- ③ 協調性を身に付ける
- ④ 生涯を通して運動に親しむ態度を身に付ける
- ⑤ きまりを守ることができるようになる
- ⑥ 体幹を支えることができるようになる
- ⑦ 様々な器具・用具を用いて運動できるようになる(サッカーやプールなど)
- ⑧ 基本的な運動動作ができるようになる(走る、跳ぶ、など)
- ⑨ 集中力を身に付ける
- ⑩ 積極性を身に付ける
- ⑪ 「体を動かすことは楽しい」という思いを高める
- ⑫ 「友達と関わることは楽しい」という思いを高める
- ⑬ 周囲に関心をもてるようになる

- ⑭ 様々な競技を知る
- ⑮ その他

### Ⅲ. ※<sup>2</sup>障害のある児童へ体育授業を行う難しさについて

最も多かった項目が「⑤指導に関すること」である。その具体例としては、集団指導のなかで個に応じた指導を行うことが見切れず難しいという声が多かった。

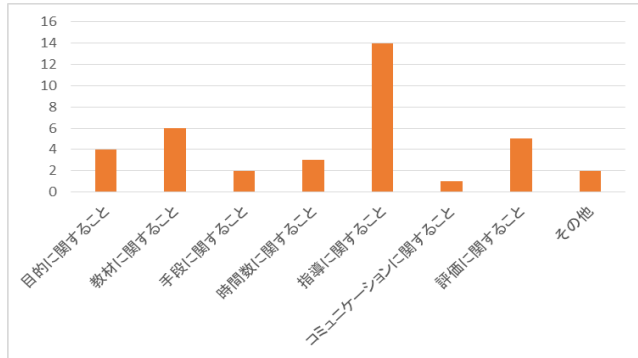


図1-3 障害児に体育授業を行うときの難しさ  
(回答者 23 名、複数回答可)

### ※<sup>2</sup>「障害のある児童への体育授業を行う難しさ」選択肢

- ① 目的に関すること
- ② 教材に関すること
- ③ 手段に関すること
- ④ 時間数に関すること
- ⑤ 指導に関すること
- ⑥ 評価に関すること
- ⑦ その他 1, 2

### Ⅳ. 体育を合わせた指導の有無と指導場面について

#### (i) 体育を合わせた指導の有無について

全体 (23 名) のうち 61% の回答者が、各教科等を合わせた指導として、体育を合わせた指導を行っている と回答した。

#### (ii) 体育を合わせた指導の指導形態

体育を合わせた指導を行う指導形態としては、生活単元学習が最も多く、次いで、遊びの学習が多かった。

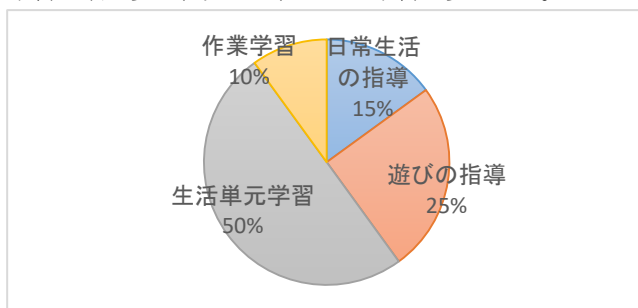


図1-4 体育を合わせた指導の指導形態  
(回答者 23 名、複数回答可)

### V. 体育を合わせた指導を行う利点と難しさについて (自由記述)

体育を合わせた指導を行う利点として、「意欲・関心の向上がしやすい」と「実生活に繋げやすい」という回答が最も多かった。体育を合わせた指導を行う難しさとしては、「学習内容が偏る」や「評価の基準が設けにくい」、「狙いが定

まらない」の3つが多い結果となった。

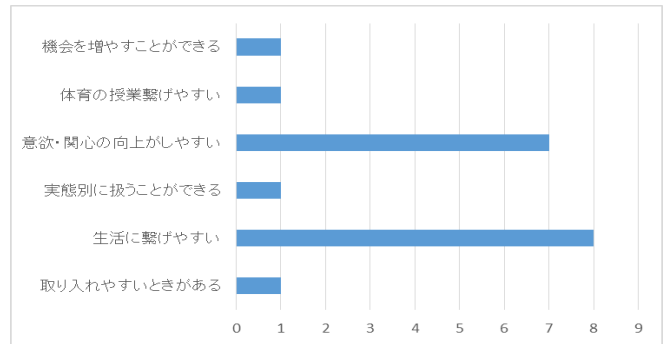


図1-5 体育を合わせた指導を行う利点  
(回答者 19 名、自由記述)

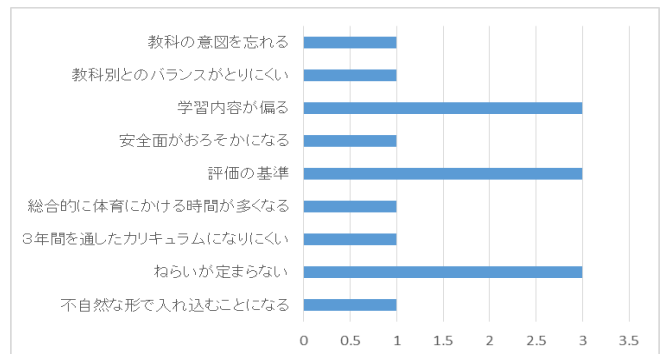


図1-6 体育を合わせた指導を行う難しさ  
(回答者 15 名、自由記述)

## ② 聞き取り調査

〔中学部主任A教諭〕

### I. 授業改善について

#### i) どのように授業改善を行っているか

- ・毎授業の授業改善の流れとしては、児童生徒の授業目標をもとに、児童生徒を見取り、授業目標を達成する姿が見られた場合には今回の授業方法を継続していく上で、さらに次回どうすると良いかを話し合う。良い姿が見られなかった場合には、その理由を考え、次にどうするかを話し合う。改善ポイントとして 教師自身の指導の改善の観点も大事にしている。
- ・話し合うタイミングとしては、その都度その都度ちょっとした時間に話し合う
- ・話し合いは、学級での授業なら学級担任間で行う。体育の場合は、各クラス体育担任が1名いるため、体育の教員たちで行う(ただ、自分のクラスの児童生徒への指導をさらに考える場合は、もう1人の学級担任へも相談・打ち合わせを行う)。

#### ii) カリキュラム・マネジメントが求められてから、授業改善の方法に何か変化はあったか

- ・特に変わりはない。今までにカリキュラム・マネジメントという言葉はなかったものの、言われなくてもやっていたこと。そのため、大きく変わった感じはしない。しかし、教科横断的な視点が入り入れられた点で、授業改善の幅が広がった。

## II. 質問紙調査における回答の不一致について

・児童生徒によって、その時間の意味合いが変わってくるため。

## III. 学習指導要領における各教科の目標・内容を漏れなく取り入れて行うための工夫について

・現在模索中。

〔研究企画係長B教諭〕

### I. 授業改善について

i) どのようにして授業改善を行っているか

・毎授業の授業改善の全校共通のポイントとして、①動機づけ②理解の促進③環境の設定、というものを設けている。そのポイントをもとに、各学部で見える化を行っている。

・学期単位での授業改善については、これまで総括的評価は行うことができているが形成的評価が弱いという課題があった。そこで、全校共通で、“実態把握と目標設定の繋がり”と“個別の指導計画と単元・授業の繋がり”があるかを振り返り、学習指導計画を改善するようにしている。この観点をもとに、各学部において見える化を行っている。

ii) カリキュラム・マネジメントが求められてから、授業改善の方法に何か変化はあったか

・教員の意識が変わった。各教科指導の意識を持つようになった。

・事細かく設定するため、とても手間がかかる。しかし、指導内容をチェックするシステムとして有効でもある。

## II. 質問紙調査における回答の不一致について

・児童生徒によって、その時間の意味合いが変わってくるため。

## III. 学習指導要領における各教科の目標・内容を漏れなくための工夫について

・特別支援学校学習指導要領に記載されている各教科の目標・内容一覧という表を参考に、何を履修できていないかをチェックし、それをもとに情報を引き継いでいくという方法を考えている。

・教育課程検討委員会を設けたいと考えている。

## 2) 考察

### ① 先生方の考える「体育の意義」の傾向

体育の意義については、回答の多かった上位4つの項目が「①体力をつける」「④生涯を通して運動に親しむ態度を身に付ける」「⑧基本的な運動動作ができるようになる(走る、跳ぶ、など)」「⑭“体を動かすことは楽しい”という思いを高める」であり、教科体育ならではの意義を感じている先生が多いことが分かる。一方で、「③協調性を身に付ける」「⑤きまりを守ることができるようになる」「⑫“友達と関わることは楽しい”という思いを高める」という他教科においても求めることのできる内容を、体育の意義として考える先生も一定数いることが確認できた。このことから、“教科体育だからこそ子どもに身に付けさせることができる”という観点のもと教科体育の意義を教員間で考えを共

有することによって、学校として教科体育について考えを深めることが可能になるであろう。

また、通常学校勤務経験の有無から、先生方の考える体育の意義を比較してみると、通常学校勤務経験の有る先生と無い先生共に、体育の意義として「①体力をつける」が最も優先順位が高く、「⑭“体を動かすことは楽しい”という思いを高める」が2番目に高い。違いとしては、優先順位3番目の項目である。通常学校勤務経験が無い先生は3番目に「④生涯を通して運動に親しむ態度を身に付ける」を意義としているが、通常学校勤務経験の有る先生は、それに加えて「⑧基本的な運動動作ができるようになる(走る、跳ぶ、など)」も重要な意義としている(図3-2)。通常学校勤務経験の有る先生は、特別支援学校でのみ勤務してきた先生よりも、基本的な運動動作の獲得を教科体育の重要な意義と捉えていることが分かる。特別支援学校においても各教科における育成を目指す資質・能力を明確にすることが求められている現在、特別支援学校よりも各教科が独立している通常学校に勤務していた先生の声を聴くことにより、体育の意義について見方を深められる可能性を示唆している。

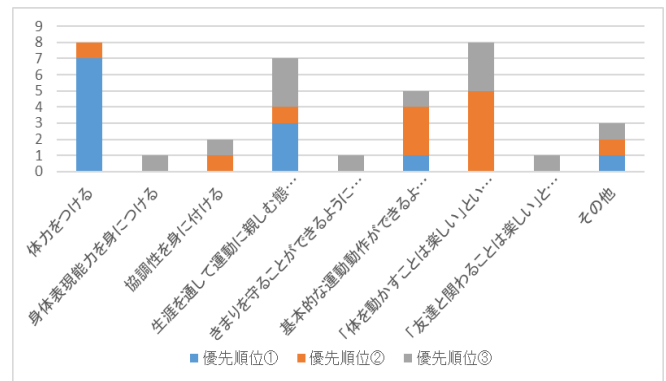


図2-1 体育の意義／通常学校勤務経験無し

(回答者は通常学校勤務経験の無い12名、優先順位をつけて3つずつ回答)

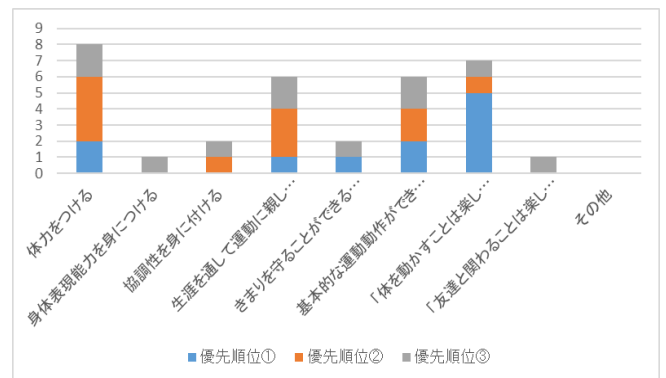


図2-2 体育の意義／通常学校勤務経験有り

(回答者は通常学校勤務経験の有る11名、優先順位をつけて3つずつ回答)

### ② 先生方の感じる「教科体育の指導を行う難しさ」

教科体育の指導を行う難しさについて(図2-3参照)は、「⑤指導に関する事」が最も多い回答であった。これについても、通常学校勤務経験の有無で回答を比較してみる。

「②教材に関すること」「⑤指導に関すること」「⑦評価に関すること」については、通常学校勤務経験の無い先生の方が困難に感じている人が多い。指導や教材に関することを選択していることから、障害のある子どもの課題を見つけてアプローチするという特別支援教育ならではの難しさを捉えていることがわかる。特別支援教育の専門性に基づいて課題を見つけて追求することによって感じる難しさであると考えられる。一方で、「①目的に関すること」「④時間数に関すること」については、通常学校勤務経験の有る先生の方が困難に感じている人が多い。特別支援学校においては、各教科等のそれぞれの授業時数については各学校で定められているため、通常学校の教科体育の授業時数とは大きく異なる可能性がある。また、各教科等を合わせた指導も存在するため、時間数のカウントが難しいことも考えられる。このように通常学校での実践との違いの中で戸惑いが生じ、困難を生んでいるのではないだろうか。

そして、通常学校勤務経験の無い先生は評価について、通常学校勤務経験の有る先生は目的について難しさを感じている。PDCA サイクルにおいて重要な目的と評価について、双方の立場の先生方が難しさを感じている。「なぜ目的に関して難しさを感じているのか、もしくは感じていないのか」「なぜ評価について難しさを感じているのか、もしくは感じていないのか」を双方の立場の先生の職場経験を踏まえながら確認し合うことで、その難しさを解決する方法を見出すことができるのではないかと。

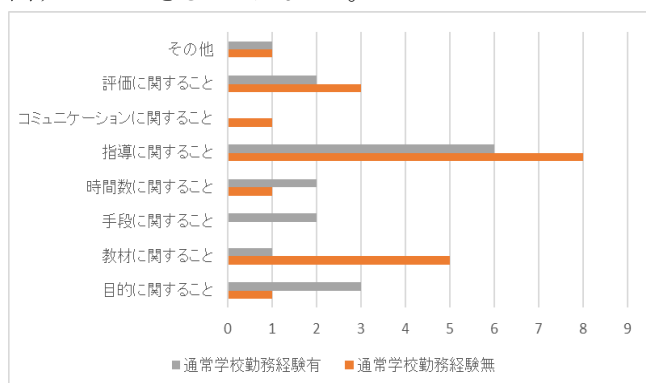


図2-3 通常学校勤務経験の有無別 障害児に体育授業を行うときの難しさ (回答者 23 名、複数回答可)

### ③ 先生方の考える「各教科等を合わせた指導として体育的要素を含む指導を行う利点と難しさ」

各教科等を合わせた指導として体育的要素を含む指導を行う利点については、動機付けとして有効であり、学習が断片的にならずに生活に結び付けることができる良さを感じている先生が多いことが分かった (図2-4)。

難しさについては (図2-5 参照)、様々な回答があったが、通常学校勤務経験の有無で比較したときに、経験の有る先生は「ねらいが定まらない」という回答が多かった。一方で、通常学校勤務経験の無い教員が感じる体育を合わせた指導を行う難しさについては「評価の基準」が最も多かった。双方の立場の先生方が PDCA サイクルにおいて重要となる目的に関すること評価に関することに難しさと感じて

いる。上述したように双方の立場の先生の職場経験を踏まえながら確認し合うことに加え、教育課程全体を見直す必要性も考えられるのではないかと。各教科等を合わせた指導という指導形態は特別支援学校 (知的障害) 独自のものであるため、教員間の共通認識を図ることが難しい可能性がある。そのため、学校として教育課程をどのように定めているのかを学校全体で捉えて直すための方法を検討する必要があるのではないかと。

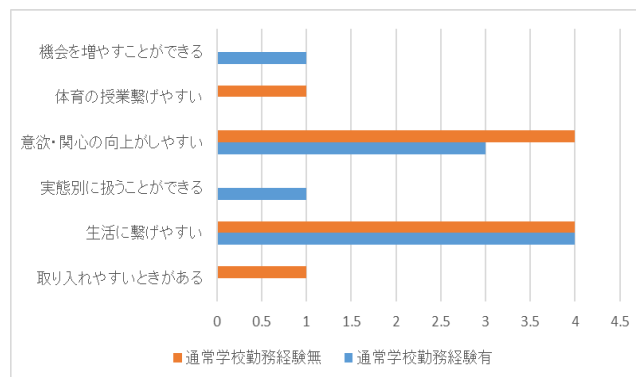


図2-4 通常学校勤務経験の有無別 体育を合わせた指導を行う利点 (回答者 19 名、自由記述)

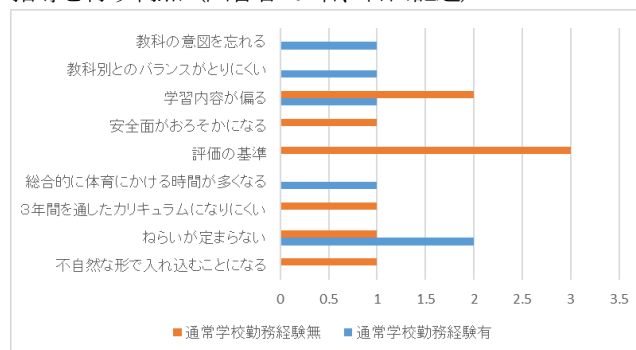


図2-5 通常学校勤務経験の有無別 体育を合わせた指導を行う難しさ (回答者 15 名、自由記述)

### ④ カリキュラム・マネジメントの実践

カリキュラム・マネジメントの取り組みの1つである授業改善の方法としては、学校内で基準を定め、各学部で可視化する取り組みによって連続性のある授業改善を試みていることが分かった。総括的に全授業を振り返ることはできなくても、1つ1つの授業の繋がりという観点で振り返ることは課題となっている。カリキュラム・マネジメントが求められるようになったことを機に、児童生徒の実態把握と目標設定の関連や、個別の指導計画と単元・授業の関連を明確にすることを目指す取り組みを行っている。それにより、カリキュラム・マネジメントは、教員の意識に影響を与えている。教科指導への意識が高まったのである。また、特別支援学校学習指導要領に記載されている各教科の目標・内容一覧を参考に、何を履修できていて何を履修できていないのかをチェックするチェック表の作成により、履修漏れを防ぐという方法を考案中であることが分かった。チェック表による取り組みは、教科別の指導と各教科等を合わせた指導の関連について整理する際に役立つことが考えられる。

#### 4. 結論

現在、各教科等を合わせた指導を実践する上では、教科別の指導との関連を明確にすることが求められており、その関連について教科体育に着目しながら研究を行った。

現在の体育は、健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを目指すことをはじめ、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成」、「健康の保持増進のための実践力の育成」及び「体力の向上」を軸に実践を積み上げられていくことが求められている。そして、育成を目指す資質・能力を明確にし、基本的な知識・技能の育成と、自ら学び自ら考える力の育成の両者を総合的に育成することを求められているといえる。それは特別支援学校において同様である。同志会による障害児体育分科会で討論が重ねられた際にも、障害児体育の目標は通常学校における体育の目標と一致するものと確認されている。通常学校との連続性を確保し、目標の系統性を持たせていくことが早くから認識されているのである。障害児にも等しく保障していく必要があることは明らかといえる。

今回の研究では様々な実践研究に学びながら特別支援学校における教科体育について検討した。実践の目的は個人の技能獲得を中心として、自己達成感を得ることや共感関係を築くこと等があり、運動文化や発達段階を踏まえた検討でもあった。このような実践の蓄積を、体育授業以外の場面で行われる体育的要素を含む指導にもいかに関わらせるのか問われる。

教科別の指導と各教科等を合わせた指導を関連付けについては、カリキュラム・マネジメントが深く関わる。埼玉大学教育学部附属特別支援学校への調査から、教員の通常学校勤務経験の有無から教科や合わせた指導に関する捉え方にも違いが見られた。各教員の経験値を活かしながら指導について検討するためには、今後は教員間の特別支援学校の教育課程をはじめとする共通認識を丁寧に形成することが求められているといえる。そのためにも、埼玉大学教育学部附属特別支援学校で開発を検討している履修に関するチェック表などの授業改善の観点を可視化できるような取り組みが、今後どのような影響を及ぼすかを引き続き検討していくことが求められよう。

#### 《文献》

- 1) 白旗和也 (2017) 『「体育・保健体育」改訂の特色とポイント』教育展望 63 (5), p. 27-31
- 2) 学校体育研究同志会 『みんなが輝く体育⑦障害児 体育の授業』 (有) 創文企画、2007、p1-3, 10-16
- 3) 学校体育研究同志会 『障害児体育の指導』株式会社ベースボール・マガジン社、1982
- 4) 芝田徳造 (1973) 『心身障害児の体育』学校体育研究同志会「体育グループ」 (43), p. 93-97
- 5) 全国障害児体育研究連絡協議会「すべての子らを、からだの主人公に—たくましく、しなやかなからだづくりを目指して—」、1987
- 6) 芝田徳造・綾部正弘・加藤徹「からだ・体育の授業づく

り」株式会社かもがわ出版、2001

- 7) 加藤徹「やったー！もっともっと楽しい体育つくろう！」株式会社星雲社、2009
- 8) 和田博史・近藤智靖「Siedentop のプレイ体育論の特徴と課題」『日本体育大学スポーツ科学研究』第2号、2013、p. 48-57
- 9) 渡邊貴裕・橋本創一・菅野敦「知的障害特別支援学校の体育・スポーツ指導における体力・運動能力調査の実際と課題」『発達障害研究』第36巻第2号、2014、p. 196-208
- 10) 菅原政彦「小・中学校特別支援学級（知的障がい）における領域・教科を合わせた指導の充実に関する研究—県内と特別支援学級の現状を踏まえた「教育課程や領域・教科を合わせた指導に関する資料」の作成を通して—」第54回岩手県教育研究発表会資料、2011
- 11) 宮崎英憲「育成を目指す資質・能力の3つの柱と特別支援学校（知的障害）の教育課程」『平成24年度版学習指導要領のポイント特別支援学校』明治図書出版株式会社、2017、p. 14-17
- 12) 日野克博「体育科・保健体育科で育成を目指す資質・能力」『平成29年学習指導要領改訂のポイント 小学校・中学校 保健体育』明治図書出版株式会社、2017、p. 14-17
- 13) 『特別支援学校学習指導要領（平成29年4月告示）』文部科学省、2017
- 14) 『中央教育審議会・初等教育分科会・教育課程部会審議経過報告』文部科学省、2006
- 15) 『特別支援学校学習指導要領（平成21年3月告示）』文部科学省、2008